

司式：鮎川 健一
奏楽：堀口 恵美

前奏：「キリエ、永遠の父なる神よ」（J.S.バッハ）

招詞：沈黙してあなたに向かい、賛美をささげます。シオンにいます神よ。
あなたに満願の献げ物をささげます。（詩 65:2）

讚美歌 3「扉を開きて」

交読詩編 15 編 01【賛歌。ダビデの詩。】

主よ、どのような人が、あなたの幕屋に宿り
聖なる山に住むことができるのでしょうか。

02 それは、完全な道を歩き、
正しいことを行う人。

心には真実の言葉があり

03 舌には中傷をもたない人。

友に災いをもたらさず、親しい人を嘲らない人。

04 主の目になわかないものは退け

主を畏れる人を尊び

悪事をしないとの誓いを守る人。

05 金を貸しても利息を取らず

賄賂を受けて無実の人を陥れたりしない人。

これらのことを守る人は

とこしえに揺らぐことがないでしょう。

朗読聖書①士師記 11:29-40

29 主の霊がエフタに臨んだ。彼はギレアドとマナセを通り、更にギレアドのミツパを通り、ギレアドのミツパからアンモン人に向かって兵を進めた。30 エフタは主に誓いを立てて言った。「もしあなたがアンモン人をわたしの手に渡してくださるなら、31 わたしがアンモンとの戦いから無事に帰るとき、わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る者を主のものといたします。わたしはその者を、焼き尽くす献げ物といたします。」32 こうしてエフタは進んで行き、アンモン人と戦った。主は彼らをエフタの手にお渡しになった。33 彼はアロエルからミントに至るまでの二十の町とアベル・ケラムに至るまでのアンモン人を徹底的に撃つたので、アンモン人はイスラエルの人々に屈服した。

34 エフタがミツパにある自分の家に帰ったとき、自分の娘が鼓を打ち鳴らし、踊りながら迎えに来て来た。彼女は一人娘で、彼にはほかに息子も娘もいなかった。35 彼はその娘を見ると、衣を引き裂いて言った。「ああ、わたしの娘よ。お前がわたしを打ちのめし、お前がわたしを苦しめる者になるとは、わたしは主の御前で口を開いてしまった。取り返しがつかない。」36 彼女は言った。「父上。あなたは主の御前で口を開かれました。どうか、わたしを、その口でおっしゃったとおりにしてください。主はあなたに、あなたの敵アンモン人に対して復讐させてくださったのですから。」37 彼女は更に言った。「わたしにこうさせていただきたいのです。二か月の間、わたしを自由にしてください。わたしは友達と共に出かけて山々をさまよい、わたしが処女のみまであることを泣き悲しみたいのです。」38 彼は「行くがよい」と言って、娘を二か月の間去らせた。彼女は友達と共に出かけ、山々で、処女のみまであることを泣き悲しんだ。39 二か月が過ぎ、彼女が父のもとに帰って来ると、エフタは立てた誓いどおりに娘をささげた。彼女は男を知ることがなかったので、イスラエルに次のようなしきたりができた。40 来る年も来る年も、年に四日間、イスラエルの娘たちは、ギレアドの人エフタの娘の死を悼んで家を出るのである。

朗読聖書②マタイによる福音書 5:33-37 ◆誓ってはならない

33 「また、あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、『偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ』と命じられている。34 しかし、わたしは言うておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。35 地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは大王の都である。36 また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。37 あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである。」

祈禱

この世の贖い主にして永遠の救い主、真の光なる御子イエス・キリストの父なる御神さま、聖名を褒め称えます。これまでの歩みを通して、今朝、新たな命と共に、再び主なる神の御前で礼拝をお献げする時を与えられ感謝致します。あなたは御子イエスをこの世に送り、御子を通して救いの御言葉を私たちに与えてくださいました。重ねて感謝致します。今、夫々の場において主の御招きに応え、この時を迎えています。

過ぐる一週間、主なる神は弱きに力を与え新たな道を備えてくださいました。しかしこれまでの日々、主の御心から遠くあったことも覚え、弱さの自覚と共にここに罪を告白し、悔い改めを申し上げます。またどうか主の御赦しの内に歩めますように。

主なる神は、弱く小さき私たちを御赦しの下で祈りと賛美、また御言葉により神の御心を知る時を備えてくださいました。この時より、新たに主なる神への献身の思いを興し、救い主なる御子イエスを、“真の人にして真の生ける神”と告白します。尚、御霊の導きと御助けを重ねて願います。また、この世の様々な出来事は主の御心から離れた、そのような姿が多々あることも否認しません。主の真理の内に招かれた私たちは、そのような暗き世にあっても、主の御業の確かさ、また偉大さを受け留めつつ、世界の平和、日本の平和のためにも祈ります。戦乱や混乱、また自然災害の重なる中で、世界に及んで人々の疲弊した心が浮かびます。その中で世界情勢は厳しさを増しています。様々に不安や苦しみ、また悲しみに置かれています。主の日を迎えたこの時に、更に豊かに主の慰めと癒しが特別にありますように。またどうか一日も早く世界での混乱が治まり、共に主を見上げて歩むことが出来ますように。また飢えや災害に見舞われている人々に主の御加護が豊かにありますように。

日本においても悲惨な出来事が絶えません。私たちキリストに従い行く者として為すべき務めが為せますように。また、心にありつつもこの場に集えない人々、また様々な思いにある人々が復活の主に招かれ、導かれ、御言葉と共に新たに生きる力が与えられますように。

時を同じくして礼拝を献げている一人ひとりの上に、また全世界の教会の働きが豊かに用いられますように。

これより語られる主の御言葉が、御霊の導きを豊かに受け届けられますように。この礼拝後には臨時教会総会も予定されています。一人ひとりの働きが御心に適ったものとしてあり続けますように。

この祈りを導き主イエス・キリストの御名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讚美歌 392「主の強い御腕よ」

説教：「誓い」

佃 雅之

今朝与えられました御言葉は、旧約、新約共に「誓い」ということについての教えが示されています。「誓い」「約束」「誓約」あるいは「誓願」、聖書の中によくみられる言葉です。キリストは今日の個所で、「昔の人は、『偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ』と命じられている」と言われました。「昔の人」というのは旧約時代を生きた人たちのことです。旧約聖書は「誓い」を立てることを許しています。しかも「誓い」に対して、恐るべき厳格さを持って臨んでおります。「誓い」の撤回、あるいは「誓い」の破棄は、神の名を汚すことになるからです。しかしキリストは今日の個所で、偽りの誓いを禁止するばかりではなく、「一切誓いを立ててはならない」と言われています。このキリストの言葉を私たちはどの様に理解するべきでしょうか。

教会では大切な出来事を執り行う時には、必ず「誓約」をします。私たちがキリスト者になる時、洗礼式の時に「誓約」があります。転入会式、信仰告白式でも「誓約」があります。長老が選挙されて任職をするときの長老任職式、牧師も就任式には「誓約」をします。教会学校教師、オルガニストなど奉仕者になる時、人によっては何度も神と会衆の前で「誓約」が求められます。あるいは、教会でする結婚式は「誓約」をして頂きます。キリストは“一切誓うな”と言われているのに、教会では肝心なところでキリスト者として立てられていく、用いられていく大事な場面で「誓約」が求められます。「誓約」と言うのは教会に限りません。社会生活も様々な「誓い」によって成り立っています。

キリストの時代のユダヤ人は神の名を口にすることを避けて、「天」に向かって、「地」にかけて、あるいは「エルサレム」を指し、また人の「頭」を指して「誓う」ということが習慣になっていたようです。神の名に懸けて行った「誓い」は破棄することが出来ない、必ず果たさなければならぬからです。しかし「天」や「地」であれば言い訳ができる、約束する前から逃げ道を作っておいたということです。キリストはこれらの空しい「誓い」を退けられました。その「誓い」には、その「約束」には何の価値も、何の意味もないからです。「誓い」の重要性が失われた時代であったようです。

そもそも「天」と「地」とは誰の物でしょうか？ キリストが「天は神の玉座である」と言い、「地は神の足台」と言われているように、全ては神の物であります。「天」も、「地」も、「エルサレム」も、私たちの体の一部である「頭」であっても、全て神が創造された物ですから、人間のものではなく神のものであります。

ここで大切なことは、“一切誓ってはならない”というキリストの言葉は『十戒』と深く結びついている、ということです。「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない(出 20:7)」と書き記されたモーセの『十戒』の第三戒です。“神の名に懸けて誓う”と言われたら、いかにも神を重んじているように聞こえます。“神に懸けて誓う”と聞くと、いかにも真実であるかのように聞こえます。しかし実は、その「誓い」は、神に責任を押し付けているだけなのではないでしょう。“神の名を淫らに唱えることは、神と取引をすることになる”と言う人もいます。具体的に言うと、“神さま、私の願いを叶えてください。叶えてくださったなら私はあなたのためにこうします”、これが取引です。

旧約聖書の時代、主なる神と取引をしようとして大きな悲劇を経験した人がいます。それが「エフタ」です。エフタは士師として紹介されています。「士師」という言葉には「治める」と「審く」という二つの意味が込められています。広い意味においては「正義を確立する人」「正義をもたらす人」という意味があって、この世界を神の意志の下に治めることを託された人たちだとされています。神の民であるイスラエルから幸福と平和を奪うあらゆる脅威を退けるために超人的な働きを担ったのが「士師」と呼ばれる人たちです。

エフタの時代イスラエルはアンモン人から虐げられていました、長老たちはエフタを自分たちの頭とし戦いの指揮官に指名します。戦いに出かける前にエフタは神に「誓い」を立てます。その「誓い」の言葉が(士 11 章)30 節と 31 節にこのように書かれています。

エフタは主に誓いを立てて言った。「もしあなたがアンモン人をわたしの手に渡して下さるなら、わたしがアンモンとの戦いから無事に帰るとき、わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る者を主のものといたします。わたしはその者を、焼き尽くす献げ物といたします。

この「誓い」の言葉を私たちならどのように聴くでしょう。一見すると信仰的な「誓い」のように聞こえます。しかし勝利をより確実なものとするために神に取引を持ち掛けているとも見る事が出来ます。「出て来る者を献げる」という言葉は、それが誰であったとしても神が要求されていない命を自分の願いのために犠牲にすることは、あまりにも身勝手に軽はずみな「誓い」のように思えます。事実この「誓い」がもたらしたのは悲劇です。

アンモンとの戦いに勝利して家に戻ってきたエフタを最初に出迎えたのは最愛の一人娘でした。神は人間の軽はずみな「誓い」に対して最も厳しい報いをお与えになります。このエフタの物語を“旧約聖書の中の最大の悲劇だ”という人がいます。また“恐怖のテキスト”とも呼ばれて長く語り継がれました。この物語を通して教えられることは、決して神と取引をしてはいけないうことです。神に取引を持ち掛けるのは偶像礼拝者のする行為です。

私たちが苦難に遭うと神の助けを求めて祈ることがあります。しかし“助けて下さるなら、何でもします”と願うなら、大きな代償を払わなければならないということが起こり得るということです。ですからキリストは、「一切誓ってはならない」と教えるのです。

士師として立てられたにも拘らず、まして 29 節の冒頭に「主の霊がエフタに臨んだ」とあるにも拘らず、なぜこのような悲劇となったのか、不思議に思われる方もあるでしょう。しかし人間は、主の霊を受けたことで完全になるわけではありません。私たちがバプテスマによって主の霊を受けても、長老の任職を受けても、牧師となり按手を受けたとしても完全なものになったわけではありません。霊を受けてから、主なる神との具体的な交わりが始まるのであります。「主の霊」は私たちに臨み、確かに私たちに捉えてくださいます。しかし、神の援助を受けようと思うなら、神の言葉への忠実さがこれまで以上にいっそう求められるのです。私たちの言葉と行いに神と約束したことが顕されていなければなりません。

今日の個所の少し前を読みますと、エフタは部族の頭となるために神を利用したと見る事が出来ます。霊を受けたことでエフタは神に近づきましたが、神を自分のために働かせようとしたのです。取引を申し出る様な「誓い」に神は応答してはくれません。エフタは「誓い」にあたって大きな間違いを起こしました。主が喜ばれるのは焼き尽くす献げ物や犠牲ではなく、砕かれた悔いる心です。主の御声に聴き従うことです。神が求められていることはどの様な状況にあっても謙^{へりくだ}って神と共に歩むことでもあります。

エフタと対称的に描かれているのがエフタの「一人娘」です。彼女は「父上。あなたは主の御前で口を開かれました。どうか、わたしを、その口でおっしゃったとおりにしてください。」と応えています。エフタの娘の言葉はキリストの言葉、私たちの罪の為に十字架に架かられたキリストの姿と重なります。キリストが負ってくださった十字架には、私たちが無責任な言葉によって人を傷つけた罪、

偽りを語ったり、約束を果たさなかった罪も含まれています。エフタの娘の父への申し出は愛によるものであります。自分で責任のとれない「誓願」をすることは、人間の驕り、全て罪です。言葉には責任が伴います。言葉によって私たちは人を傷つけたり、時には殺してしまうこともあります。ですから無責任な言葉は慎まなければなりません。言葉によって犯す罪の大きさを意識しなければならないのです。エフタは自分の知恵で判断して、行動することを止めて主の御心を尋ねることが必要でした。

今の私たちはどうでしょう。御言葉に聴き従う生活を送ることが出来ているでしょうか。自分の発した言葉に責任を持つことが出来ているでしょうか。教会で誓った「誓約」の言葉を覚えているでしょうか。

キリストは今日の個所の最後に「あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである。」とされています。神に対しても、人に対しても、嘘のない真実な日常を過ごすことが出来ていたなら、あとは「はい」か「いいえ」、それだけで充分だということです。「余計なことはいわない、誤魔化さない、真実を語れ！」ということです。

私たちは「天」や「地」に向かって「誓い」を立てる必要はありません。いろいろなものにかけて誓って、それで自分の誠意を、約束の重みを示そうとすればするほど、その「誓い」の言葉は私たちから神を遠ざけます。キリストが、ここで私たちに問われていることは、「常に神と人に誠実であれ!」、「あなたの口は真実を語れ!」ということです。キリストが「一切誓ってはならない」と言われるのは、「誓い」そのものの禁止ではなく、神と人に誠実に生きることの出来ない私たちへの戒めの言葉であります。

実際、洗礼を受けてキリスト者となって以降の生活を顧みて、神との約束をすべて守り確かに履行してきたと言える人がどれだけいるのでしょうか。私たちは、「誓い」を何度繰り返し、なんと「誓い」を破り続けてきたのでしょうか。しかし神はそのような私たちを全面的に肯定して受け入れてくださっています。

今日の説教の冒頭に申し上げましたが、私たちは教会で、あるいは信仰生活の重要な場面で「誓約」をします。その時のことをよく思い出してください。私たちは誰一人自分の誠実さで、自分の力で努力して「誓いを果たします」と言った人はいません。「誓い」の時、私たちは自分が無力であることを自覚します。自分が無力であるから「誓い」を立てるのです。その意味でエフタの「誓い」とは全く違います。しかも教会では一人「誓い」を立てた人はいないはずで、「誓い」はキリストによって結ばれた兄弟姉妹たちと一緒にキリストの御体なる教会で行われるものであるからです。教会で為される「誓い」には、私たちは「アーメン」と応えます。教会での「誓い」は一人ぼっちでの約束ではないのです。キリストの信実に支えられて、キリストと共に繋がっていることを確認するためです。教会での「誓い」は、その務めに召された人だけの問題ではないからです。洗礼を受けた兄弟姉妹のために、長老のために、牧師のために、人間の力ではその務めが全うできないからこそ皆で「誓約」をします。

先日この礼拝堂で行われた結婚式においても、新郎新婦だけではなく列席者全員で「誓い」を立てました。その時にも、「言葉をもって約束したことを誠実に守ることが出来るように、この二人に必要な助けを与えてください」と神に祈りました。神に支えて戴かなければ信仰生活も結婚生活も歩み通すことは出来ないからです。

イエス・キリストは不誠実で不確かな私たちを招き、用いてくださいます。私たちの神は諦めることなく、失望することなく、私たちを見捨てられません。不信仰に陥る弱い私たちが神の言葉に「然り、アーメン」と心から告白することが出来るようにキリストが与えられています。私たちが今触れている神の言葉、イエス・キリストに触れる、キリストに従う、キリストの言葉に聴き従う、その時、罪深い私たちであっても神を讃えるためにキリストの聖名によって「アーメン」と唱えることが許されています。真実である神の言葉に「然り、アーメン」を応えながら、祈りながら、祈られながら、主と共に、兄弟姉妹と一緒に歩んで参りましょう。

お祈りを致します。

聖なる神、あなたの御子イエス・キリストの言葉こそ、私たちを救う言葉です。自分の口に出した言葉すら守ることの出来ない私たちを赦し、受け入れてくださるあなたの計り知れない愛に心から感謝致します。どうか私たちがキリストの言葉に従って歩ませてください。常に福音を受け入れ、信じ、聖霊の執り成しによって生きることが出来ますように。

私たちの救い主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:510「主よ、終わりまで」

献金・感謝(中川真明)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

天の父なる神さま、あなたの大いなる聖名を賛美致します。御国を来たらせてくださいますように。降誕前第5主日の今朝、私たち教会へと呼び集められ、またライブ配信を通して共に神さまに礼拝をお献げすることが出来ましたことを心より感謝申し上げます。

敬愛する佃牧師を通して御言葉を頂き、これからの一週間の歩みを始めることが出来ますことを心より感謝申し上げます。私たちは神さまから多くのものを戴き、なかなかそれに応えることができません。そのような小さな私たちですけれども、それでも神さまは一人ひとりを「よし」としてくださり、私たちは歩み続けることが出来ます。どうか私たち悔い改めて、また改めて神さまの方を向いて、これからの歩みを為していくことが出来ますように導いてください。

沢山戴いている物の一部を献身の徴としてお献げ致します。どうか神さまが御用のために用いてくださいますようお願い致します。

今、世界に目を向けると、命が大切にされないことがいろいろな所で起こっております。私たち一人ひとりが平和を実現する者として、夫々の場での歩みを為していくことが出来ますようにお導きをお願い致します。

今日の礼拝を覚えつつ出席することの出来なかった方々お一人おひとりの上に特別な御顧みがありますように。また今日、この後、持たれます臨時総会の上にも神さまのお導きをお願い致します。

皆さんと共に「主の祈り」をお祈りして、新しい一巡りの時を始めることが出来ますように。「主の祈り」…アーメン。

派遣・讃美歌92「主よ、わたしたちの主よ」

派遣と祝福 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告：長老(補充)選挙のための臨時教会総会案内

後奏：「ただみ神にのみゆだねまつる者は」(J.S.バッハ)